

令和元年 11 月 16 日

北関東フォーラム

於：シムックス

中齋塾 北関東フォーラム
平成 31 年度 第 10 回（渋澤栄一 特別フォーラム）

朝早くから貴重な時間を割きお出で戴きまして有難うございます。

まず最初に、中齋塾フォーラムではどういうことを学んでいるか、若干お話ししてから、本日のテーマの渋澤栄一についてお話をさせて戴きたいと存じます。

紹介書籍は渋澤栄一の『論語講義』です。この本は、渋澤栄一が話をしたものを口述筆記で本にまとめたものです。私はこの本が大好きで、周りの人に良い本だから是非読んでみて下さいと勧めたのですが、半年、1 年経って感想を聞くと、皆さん難しく読めないと言われるのです。それで、私が簡単にまとめたのが『渋澤論語を読む』（明德出版社）です。更に渋澤栄一について分かりやすく紹介した本が『陽明学のすすめV 人間学講話渋澤栄一』（明德出版社）です。3 冊、回覧致します。

最初にお断りしておきますと、私の話はあちらこちらに脱線します。学問には、哲学をベースにした縦の学問と横の知識をどんどん広げていく横の学問がありますが、横の学問をお話するのに、色々なところに話が飛びます。そうすると、或る日突然それが集約されて、縦の学問と一つになります。

中齋塾フォーラムでは毎回、恒例の質問をしています。私は夜寝る時、必ず自分自身に質問をして、納得してから寝ています。ちなみに、渋澤栄一も寝る前に論語の三省（「吾日に吾が身を三省す」）をしていました。三省の「三」は、三つではなく、沢山という意味です。渋澤栄一は寝る前に、今日は誰と会ってどんな約束をしたか、一つひとつ思い出してから寝ていました。

私の質問とは、<今日は良い日だったか> <嘘をつかなかったか> <有難うと言ひ、有難うと言われたか> <健康法を行ったか> と自問自答して、最後に、明日以降のことを過去形でイメージして寝ています。これは言葉としては非常に難しいのですが、大金持ちになる一つの秘訣だそうです。明日以降のことを過去としてイメージ出来れば大金持ち、若干イメージ出来れば中金持ち、ほんの少しイメージ出来れば小金持ちになるようです。

では恒例の質問を中齋塾の方にお聞きします。

○ここ 1 ヶ月、良い日が比較的続いたと思う方

○ここ1ヶ月、嘘を比較的つかなかった方

では、一度も嘘をついていない方？・・・お一人手が挙がりました。やはり、「比較的」とつけると手が挙げやすいですね。これは日本民族の特徴です。白黒はっきりしない、右でも左でもちょっと振れるようにゆとりを持つ、許容する文化です。日本民族はそこらへんが優秀だと思っています。

○ここ1ヶ月、有難うと言ひ、有難うと言われたことが多かった方

○ここ1ヶ月、比較的健康法を実行した方

ちなみに、私の健康法は真向法です。今日は、真向法の師匠の八木先生がお見えです。

先週、湯島聖堂で行われている太極拳を見学しました。というのは、東京フォーラムの会員さんから来年2月に太極拳の研修会での講話を依頼されているので、見学させて戴きました。皆さん身体が柔らかいので驚きました。先生にお聞きすると、何年も練習していると自然と柔らかくなるそうです。私は、身体が柔らかい人は頭も柔らかい、身体が硬い人は頭も固いと思っております。歳をとって頑固者にならないためにも、身体を柔らかくしておくとうれしいですね。ご高齢でパソコンが苦手という方は、身体を柔らかくすると、比較的楽に操作できるようになると思います。

今、体力年齢はどんどん若返っています。自分の両親の歳で今の自分を見るのではなくて、10年若く考えるとちょうど良いと思います。

では、論語の視点に参ります。本日は陽貨篇 22・23 です。

【二十二】子^し曰^{いわ}く、飽^{ほう}食^{しょく}終^{しゅう}日^{じつ}、心^{こころ}を^{もち}用^とう^{ころ}る^な所^{かた}無^なければ、難^{かた}い^{ばく}かな。博^{ばく}奕^{えき}と^{もの}いう^{もの}者^{もの}あ^あら^{これ}ず^なや。之^なを^なお^やを^{まさ}す^まは^ま猶^な已^やむ^まに^ま賢^まれ^まり。

孔子が言うには、一日食べたいだけ食べて頭を使わずにいるのは良くない。双六や囲碁があるではないか。何もしないでいるよりは、頭を使うから良いだろう。

論語は孔子の言行録ですから、その場面や状況をイメージして下さい。ここは、孔子が弟子たちに向かって話をしている場面で、あまり学ばない弟子を叱っているようなイメージでお考え下さい。

孔子塾に入門しているお弟子さんは皆、就職活動で集まっています。孔子塾で優秀だと、その国の大臣クラスに登用されました。官僚になって下から上がっていくのではなくて、いきなり上の方の位に抜擢をされるので、孔子の所にどんどん弟子が集まって来たわけです。

中斎塾フォーラムでは、論語を現代に置き換えて解釈しています。

「飽食終日、心を用うる所無ければ」という部分は、お子さんを叱る時に使いますね。おやつを食べただけ食べて宿題もしないお子さんに、「勉強が出来ないと大人になって困ることになるぞ」と叱ったことがある、或いは、親から言われた経験がありませんか？

最近、上級国民という言葉がマスコミで騒がれました。上流階級・下流階級という言葉もあります。教育をきちんと身につけなければ良い学校に入れないし、良い会社に入れない、良い人生が送れない・・・教育が肝心だと思って、親は子供に教育をつけさせようと必死になる。その結果、どんどん格差社会が広がっています。

なぜ、そういう風潮が生まれたか。格差社会が広がる根っこにあるのは、いわゆるグローバリズムです。今のグローバリズムは、アメリカが行き詰ってしまったので、お金を商品にして自分たちのルールを世界各国に広げて行って世の中を席卷していこうとした、それが功を奏して世界全体にグローバリズムが広がりました。結果、一握りの超富裕層と、そうでない人たちとに明確に分かれました。

日本は、かつては「一億総中流社会」と言っていました。以前は、政府は年収 400 万円を中流という言い方をしていましたが、7、8 年前から年収 200 万円を貧困層のボーダーラインとしたので、今は 200 万以上を中流層と呼ぶのが定着しつつあります。

「博奕という者有らずや。之を為すは 猶 已むに賢れり」という部分を考えます。オリンピックを契機にしてカジノをやろうと政府が言い出したら、幾つかの自治体が誘致に手を挙げています。ここを皮肉に読めば、「もう少し良いところに頭を使いなさい。カジノを持ってくるくらいでお茶を濁している。まったく後世の人間は阿呆だね・・・」と孔子が言っていると感じます。

【二十三】^{しろいわ}子路曰く、^{くんし}君子は^{ゆう}勇を^と尚ぶかと。^{しいわ}子曰く、^{くんし}君子は^{ぎもつ}義以て^{じょう}上と^な為す。^{くんし}君子^{ゆうあ}勇有りて^{ぎな}義無ければ、^{らん}乱を^な為す。^{しょうじん}小人^{ゆうあ}勇有りて^{ぎな}義無ければ、^{とう}盗を^な為すと。

子路が孔子に聞きました。「君子は勇気を尊重しますか」

孔子が答えました。「君子は、勇気よりは正義感が上だ。勇気だけで正義感がなければ、反乱を起こす。小人物は、勇気があり余って正義感がなければ罪を犯すことになる。」

これは、子路が入門して間もない 10 代後半、孔子が 20 代後半の頃の会話です。子路は、

孔子の評判を聞いて、似非学者を見破ってやろう！と道場やぶりにやって来て、孔子に諭されて弟子になったという経緯があります。孔子は、子路は愛すべき男ではあるけれども大胆粗暴で、間違えると暴力で世の中を渡ってしまいかねないと思っているので、正義感を身につけなさいと導いています。

この文章は政治家になりたての人が読めばよいと思っていましたが、最近は大臣クラスも読まなければなりませんね。政治家は馬鹿な法律を沢山作っています。今回の消費税の軽減税率もしかりです。この間コンビニに行ったら、イートインのテーブルにテープが貼られていました。8%の消費税で買ったものは、その場で食べてはいけないというわけです。法律で、わざわざ不便にしています。しかも軽減税率は9か月という時限付きというのですから、おかしい話だと思います。

渋澤栄一は、国民にとって一番困るのは重税だと残しています。渡部昇一さんも著書『税高くして国亡ぶ』の中で、増税国家が衰退するのは歴史の鉄則と言っています。私の師匠である木内信胤先生も、国が衰えてきたら減税しかないと言っておられました。私はそれを信じています。

今の法律の作り方は、政治家が無能だからです。消費税を浸透させるために軽減税率などという目くらましを作ったものだから、マスコミは政府の味方をして、そこばかり強調し国民の目をそらしています。今日は上毛新聞の二村顧問がお出で下さっていますが、やはり新聞は木鐸ですから、正しい道はこちらだと指導していかなければいけません。しかし今や、メディアが大きく報道する時は、その陰で政府は国民に不都合なことをそっと進めていると思っています。政府がぱっと花火を打ち上げた時には、何か国民にとって困るようなことを進めている、そう思って新聞をよく読まなければいけません。

ということで、政治家は正義感なく目先に都合のよい法律を作ろうとする。そして、国というものは、若干先の方を見て、他の国々とやり合う時に平気で嘘をつくし、国民に対しても嘘をつくし私は思っています。国がどういう嘘をついているか・・・、源泉徴収が最たるものだと思います。源泉徴収はもともと戦費調達のため時限立法で始められました。戦争が終わったらやめるという公約でしたが、今でも堂々と続いています。

3.11の復興税にしても、集めた税金を政府はきちんと使ってもらいたいと思います。汚染地域では補償の対象者に支援金が配られましたが、実際にその地域に行って話を聞くと、お金を沢山もらっても使い方が分からずに身を持ち崩す人が増えたと言います。お金をつぎ込んで公共施設を作ったり道路を整備するのは結構ですが、そこで生活している人たち

は困っています。私は以前、北海道南西沖地震から復興したと言われた奥尻島に行きましたが、復旧復興したのは建物だけで、島民、特に若い人達は島から出てしまって人口が激減していました。

官僚が無能だから、現場に行かずにただお金を出しているだけで、自分たちのやっている政策・施作が現実にとどれだけ役に立っているか見えないままです。今の政治家や官僚は良いことをしたいと願って行動しているのだと思いますが、残念ながら歴史に学ばなかった。知識だけを増やして、知恵になっていません。ですから日本民族がどんどん劣化して来ていると思っています。

では、本日の講話のテーマ、渋澤栄一についてお話致します。渋澤栄一は新札の1万円札の顔に決まりましたから、皆さんも関心があって、今日は沢山の方にお集まり戴いたと存じます。

チラシにも書きましたが、渋澤栄一がフランスに行って何をしたか、前半の残り時間でお話します。

渋澤栄一は主君である一橋慶喜の弟昭武に随行して、69名の使節団の一員としてパリに渡りました。パリに行って驚いたのは、パリの街は夜なのに外を歩いても明るいし、噴水が出ていて道路に砂煙が立たないようにになっている。家庭では蛇口をひねれば水が出て、ガスで火を点けることが出来る。上下水道とガス管が地面の下に張り巡らされていることを聞いて、普通の人は「便利でいいなあ」で終わりでしょうが、彼の凄いところは、なぜ？ どうして？ の次に実行力があつたところです。実際に地下に潜って調べました。そして、是非これを日本に持ってきたいものだと強く思いました。

更に、そのようなことに使う資金は合本組織という制度で、広く国民から金を集めて大きな金額にして世のため人のために使っているのだと銀行家から聞き、日本に帰ったら銀行家になって合本制度を作りたいものだと強く思いました。

また、銀行家が政治家や役人、軍人と対等に話をしているのを見て、官尊民卑でないことに驚きます。更に、ベルギーに行って製鉄工場を見学した時には、国王自らが商人のように鉄を売り込んでいることに衝撃を受けます。

とにかく驚愕することばかりで、日本に帰ったらそれらを実現させたいと強烈に思って帰国をします。

日本に帰って来た栄一は、明治政府に仕官をすることになるのですが、そのきっかけは

明治新聞の記事でした。

静岡藩に渋沢栄一という者がいる。彼は徳川昭武公に随行して先年フランスに渡航し、このほど帰朝したが、フランス滞在中二万両の予算を残し、これとは別に自分一己の才覚で四万円の利益を貯えた。この四万両を静岡県内の生活困窮者に分配し、自分は一銭も私しなかった。

当時の新政府にはお金のやり繰りが出来る人間がいませんでした。山田方谷に断られ、由利公正が金融財政政策を担当していましたが、この記事を見て租税官吏に採用したいと渋沢栄一に白羽の矢を立てたわけです。渋沢栄一は断りましたが、主君の一橋慶喜に言われて渋々仕えたという経緯があります。フランスに行って驚愕した様々なことを日本に導入したいという志が生まれたから、明治政府に仕えて租税制度や度量衡等の改革をしたわけでしょう。

後半の講話に参ります。休憩時間に、渋沢栄一について脱線の方がよいという意見がありましたので、レジュメから脱線して、奥様から見た渋沢栄一について申します。

渋沢栄一の最初の奥様は千代さんという女性で、子供を3人産んでいます。頭の良い方だったようですが、早くに亡くなりました。渋沢栄一が住んだ家が、今は青森県の古牧温泉に移築されていますが、その家を建てる時、設計をした清水喜作（清水建設の2代目棟梁）と一緒にコンパスを引いたり、木場に行って木材を選んだりしたそうです。

その千代夫人が晩年、渋沢栄一に「あなたはキリスト教でなくてよかったですね。キリスト教は女性を見ているだけで誨淫の罪になるけれど、論語は何もありませんから」と皮肉を言ったそうです。

その言葉を補強する話が二松学舎に残っています。渋沢栄一は80歳になって二松学舎大学の舎長（今の理事長）になりました。学生たちへ講演をする中で、或る時「先生は人格者だと思っていますが、そうではないという話を聞きました。本当ですか」と質問され、「皆様には申し訳ないが、その通りで弁解の余地はない。忸怩たる思いであるが、勘弁してもらいたい」と答えたそうです。

下半身についてはご自身も認めていたようですから、沢山子供がいました。明治時代は正式に権妻さんが認められていて、権妻さんの子供も法的に相続の対象になりました。渋沢栄一に権妻さんがいてもおかしくはないのです。そこで止めておけばよいのですが、あちこちに手を出したものだから、奥様が皮肉を言ったのでしょう。

もう一つ、こんなエピソードがあります。栄一がフランスに出かける時、「お前は武士の妻であるから、正しい生活をせよ。万が一の時は自害せよ」と懐剣を渡され、千代さん

は栄一のことをしっかり守っていたわけです。ところがフランスから届いた手紙に、丁髷を切って洋服を着た栄一の写真が入っていました。武士の恰好で出かけた栄一が、嫌っていた毛唐の姿になっているのですから相当驚いたのでしょう。千代さんは、筆まめだった栄一から届く手紙にほとんど返信しなかったようですが、この時は憤慨して「日本に帰ってきたら、きちんと直してください」と手紙を送っています。

栄一が42歳の時、千代さんが亡くなります。栄一はとても悲しんで、奥様のために碑を建てています。碑文は漢学者の三島中洲に依頼しました。三島中洲は裁判官でしたから、碑文を書くにあたって奥様との馴れ初め等を細かく問い質し、栄一は、「尋問されているようだったけれども、出来あがった碑文は素晴らしいものだった」と語っています。

千代さんが亡くなった翌年、渋澤栄一は再婚しています。2番目の奥様は兼子さんという方で、この方は4人の子供を産みました。

渋澤栄一の孫の渋沢敬三（大蔵大臣を歴任）の息子さんで渋澤栄一の曾孫にあたる渋澤雅英さんという方がおられます。現在は90歳を過ぎておられます。私の師匠である木内信胤先生の息子さんで中斎塾フォーラム顧問の木内孝さんとはいとも同士で、数年前、木内顧問にご紹介戴いてお会いしました。その時、雅英さんは「私は渋澤家の家訓は嫌いです」と言っておられました。渋澤栄一は7人の子供以外に沢山の子供がいましたから、その後始末をするのに家訓を作ったのであろうと言っておられました。ですから、千代さんから見た栄一は、かなり困らせられた亭主だったのではないかと思います。

千代さんから見た渋澤栄一はこれくらいにして、渋澤栄一の人生でいくつかの岐路となったことを申します。

渋澤栄一は深谷の生まれで、もともとはお百姓さんですから、小さい頃は武士になりたかったわけです。小さい時から本が好きで、歩きながら本を読んでいて川に落ちたこともありました。14歳の頃には家業の藍玉商を手伝いながらコツを覚えて、なかなか商才があったようです。

青年になると情熱が溢れんばかりになって来ます。ちょうど江戸末期から明治維新の頃ですから、志士たちは論語の「明日に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」を呪文のように唱えて、尊王攘夷の行動にうって出ました。渋澤栄一も藍玉の商いを手伝いながら内緒で蓄えた金で大量の武器を買い込み、高崎城を乗っ取り、軍勢を集めて横浜の外国人居留地を襲い、夷狄を皆殺しにしてくれよう・・・と、世のため人のためと信じて、今でいえばテロを計画します。この計画は寸前で止めたので実行には至りませんでした。大変な血沸き肉躍る青年時代だったわけです。

熱が冷めると、今度は幕府に捕まらないように、親に勘当してもらって、いとこの喜作と共に京都に逃げます。京都では、飲めや歌えで遊び暮らしたのでしょうか。親から貰った餞別の百両をあっという間に使ってしまいます。そこで、一橋家の家臣の平岡円四郎に頼んで、仕官をすることになるわけです。

一橋家に仕官するきっかけが面白いのですが、平岡円四郎の発案で、お殿様が鷹狩りで馬に乗って駆けてくるところを栄一が必死に追いかけて、お殿様の目に留まって、お目通りを許してもらったのです。渋澤栄一は小太りでしたから、後に「お爺さんは必死に走って、目がくらんで大変だった」と語っています。

一橋家に仕官して間もなく、栄一は無一文でしたから、猪飼正為という同僚から二十五両を借ります。借りたものは返さなければなりませんから、儉約をして、給金の四両一分から一両ずつ返済しました。これも孫娘との会話の中で、お腹がすいて天井裏の鼠を捕まえて焼いて食べたというエピソードを語っています。当時はお金を借りても返さないのが当たり前という風潮でしたから、借金を返したということで渋澤栄一は一橋家の中で信用を得ていきます。

更に、役を与えられると栄一はどんどんアイデアを出して、能力を発揮していきます。篤太夫という名前をもらって一橋家の中で出世をし、実力を認められてフランスに渡航することになるわけです。

ですから渋澤栄一の人生の岐路は、テロを計画したことが一つ。それから、一橋家に仕官したことが一つ。そして、最も大きな分岐点となったのは、フランスでの体験です。栄一はフランスで見るものすべてに疑問を持ったと申しました。これが栄一の人生を大きく変えました。

お時間が少なくなりました。レジュメの最後にある、渋澤栄一の生涯を簡単に申します。数えの年齢で申します。

・19歳 結婚

親から見ると、栄一が遊び狂っているのです。結婚すれば少しは落ち着くだろうと思ったのですが、結婚しても治りませんでした。

・25歳 一橋家に出仕

これによって世の中に出たわけですが、この時の岐路は、走るだけの体力があって、必死になって走ったことです。

・28歳 フランスに渡航

これは先ほど申しました内容で、なぜ？なぜ？を実行しました。

・30歳 明治新政府に仕官

これも先ほど申し上げた新聞記事が岐路になりました。渋澤栄一が無欲で動いていたから、新聞に載ったのだと思います。

・34歳 辞職 第一国立銀行開業

明治新政府を辞職したのは、大久保利通と喧嘩をしたからです。ご本人が自分の人生を振り返って、「私の人生は20代前半から30代半ばくらいまでが面白かった。あとはおまけみたいなものです」と言っています。おまけの人生とは、銀行家としての生涯で、最後におまけで教育界という流れでした。

おまけの人生とはいえ、五百数十にのぼる日本の基幹産業を育成しました。第一国立銀行は日本で最初に出来た民間の金融機関です。第一国立銀行の経営をする上で渋澤栄一は、「銀行は世のため人のために尽くす会社を応援し、育成していくべきものである。担保をとって金をかすのではない。社長の人物を見て金を貸せ」と言っています。人物を見てお金を貸すというのは素晴らしいですね。今日は東和銀行の方が太田支店長以下3名お見えになっていますが、如何でしょうか？

渋澤栄一は金融機関の頭取として、日本の基幹産業なるものを育成していきました。根っこにあるものは、日本を外国の植民地にしてはならないという意味です。今のようないまのまま日本が進んでいくと中国と同じような憂き目にあう、そうならないと考えていました。

最後に、人生の岐路として、65歳の時に風邪をひいて死にかけています。幸い九死に一生を得、77歳で銀行を引退し、あとは世のため人のための社会奉仕や教育の団体の設立に力を注いで、92歳で生涯を終えます。

息子さんから見た渋澤栄一はどうだったのでしょうか。

渋澤秀雄さんは、「父は次から次に仕事を作り、仕事を追いかけ回しているような人間でした。人間関係で物事をやるのではなく、理屈で全部やるタイプでした」と語っています。息子さんは上半身と足（行動力）を見ていますね。

また、栄一が亡くなった年の短歌雑誌「アララギ」に掲載された父親の死を悼む一首

資本主義を罪悪視する我なれど 君が一生の尊くおもほゆ
を発見し、「栄一が誠実に働き通した幅の広い一生は、別の角度から物を見る人の目にも、これだけの共感を与えたいのである」と書き残しています。

やはり渋澤栄一の生涯は素晴らしい良い人生だったのだと思います。

お時間が参りました。ご清聴有難うございました。渋澤栄一について面白いと思ったなら、どうぞ自分でお調べ下さい。話を聞いてお終いにするのはもったいない。現場主義が良いと存じます。